

まえがき:交感・コラボレーション・忘却・歴史：
汝はアジアをどのように語るか
(交感するアジアと日本)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008103

まえがき：交感・コラボレーション・忘却・歴史

—汝はアジアをどのように語るか—

楊 海英

歴史や文化を誰の視点で、いかなる立場と視線で語るか。これはともすればイデオロギー的な問題である。研究対象の時代を近代、領域をアジアに特定した場合、より複雑した様相がわれわれの眼前に現れる。

アジアにおいて近代化をリードしてきたのは、日本である。日本型の近代文明の合理性はアジアの各地域と諸国家、それに各民族に導入され、定着していった。日本型近代文明は工業化にのみ代表されるのではなく、言語と文学、衛生と医療、あるいは軍事技術の形でも広がっていき、今日まで機能しつづけている。20世紀前半の歴史的展開により、いわゆる「戦勝国史観」の正統化によって、日本型文明に対する排斥と否定は今に続く形でみられる。「交感するアジアと日本」と題する国際シンポジウムはそうした従来の政治的な難関を突破し、近代文明史の脈絡のなかで日本型近代化のアジアへの拡散と定着について再検討することを目的としている。従来の植民地主義研究の視点からだけでなく、マイノリティの視点からも再考をすすめる。私がこうしたシンポジウムを企画した経緯は以下の通りである。

「ニセ」でもないし、「チャイナ」でもないモンゴル史

巷の読書家たちに読まれている本がある。広中一成氏の『ニセチャイナ—中国傀儡政権 満洲・蒙疆・冀東・臨時・維新・南京』（社会評論社、2013年）だ。満洲と蒙疆以外をチャイナとして、傀儡として語るには私も異論はない。しかし、満洲と蒙疆はちがう。特に蒙疆をニセものにして、チャイナのコンテクストのなかで論じるのは典型的な歴史修正主義で、歪曲行為であるとしか言いようがない。

蒙疆政権とは、チンギス・ハーンの直系子孫である徳王ことテムチュクドンロブ王が1924年から始めたモンゴルの民族自決運動に淵源する。満洲事変後には自決運動の名称をモンゴル地方自治政務委員会（略して蒙政会）やモンゴル軍政府、そしてモンゴル聯合自治政府などと改編して、最終的には1941年に8月4日になってモンゴル自治邦として定着する。日本はチャイナ・プロパーへの侵攻を拡大するにつれ、政策も動揺した。そうした過程のなかでモンゴル人主体の察南自治政府とチャイナ人（ここでいうチャイナは、岡田英弘が2014年に藤原書店から出した『シナ（チャイナ）とは何か』内の概念規定にしたがっている）の晋北自治政府などを併合して創ったのが蒙疆政権である。この蒙疆政権は終始、モンゴル人たちに嫌われて

いた。モンゴルではなく、蒙疆と呼ばせた日本側の政策にもモンゴル人たちは抵抗していた。そうした事実は徳王自身が残した『徳王自伝』(岩波書店、1994年)や彼の側近のひとりであるジャチスチンが東京で書き残した二冊の回想録に詳しい(札奇斯欽『我所知道的徳王和当時の内蒙古』一、1985。二、1993年、いずれも東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)。

いうまでもなくモンゴル人たちは「モンゴル自治国」の実現を求めていたが、チャイナ人よりは優しかったはずの日本人から与えられたのは「邦」であった。国にしる、邦にしる、所詮は漢字を得意とする「文明人」たちのゲームなので、モンゴル人たちはそのモンゴル語訳のウルス(ulus)に満足するしかなかった。モンゴル自治邦も日本のコントロール下にあったが、それでも満洲国のモンゴル人たちからも期待されていた。いざ、戦局が変わった頃には、実力のある満洲国のモンゴル人たちと、国家の体裁を備えていたモンゴル自治邦側とが一致団結して民族自決を実現しようと、何回も当事者たちが話し合っていた事実が上に例示した書物のなかにある。なぜか、広中一成氏の目には留まらなかったらしい。

モンゴル人たちは1911年の独立運動をAsia's First Revolutionと位置づけ(Onon, Urgunge, *Asia's First Revolution*, E. J. Brill, 1989)、立憲君主制の形式で近代化した明治政府よりも徹底した革命だったと認識している。モンゴルの自決運動が「ヤルタ協定」によって1945年夏に葬られた際も、徳王は「自分は中国人だということは恥ずかしい」と主張し、彼の部下たちも「私は再び〈我們中国人〉という言葉の口にはすることはできません」と宣言し、モンゴル人民共和国を祖国とみなした(ハンギン・ゴムボジャブ「日本の敗戦と徳王」『月刊 シルクロード』1977年7月号)。19世紀末以来のモンゴル人たちの宿願は中国からの独立の実現であった。モンゴルの知識人や政治家たちは「モンゴルは中国と日本の二重の植民地」だと認識し、「二人の奴隷主のなかでは日本はよりましな方」だと理解していた。日本によってさまざまな制限が加えられたなかでも、モンゴル人たちは抵抗し、民族自決を獲得しようと諦めなかった(楊海英『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』上・下、岩波書店、2009年。同『続 墓標なき草原』、2011年。『中国とモンゴルのはざま—ウランフーの実らなかつた民族自決の夢』、岩波書店、2013年。『チベットに舞う日本刀』文藝春秋、2014年)。こうした事実と真実を無視して、他民族の歴史をニセにしてチャイナ史として歪曲することはとうてい看過できる行為ではない。

少数民族の歴史を他人の歴史の一部として論じること、具体的にいうならば、諸民族の歴史を「チャイナ史の一部」として語る行為は政治的な営為である、と私の高校時代の同窓生Urady E. Bulag氏は批判する(Urady E. Bulag, *The Mongols at China's Edge, History and the Politics of National Unity*, Rowman & Littlefield

Publishers, INC, 2002)。彼はケンブリッジ大学の人類学部を舞台として活躍している。私は、モンゴルの歴史をチャイナの一部として書くことこそ反省しない植民地主義思想の継続だと論じた（楊海英『植民地としてのモンゴル—中国の官制ナショナリズムと革命思想』勉誠出版、2013年）。反省が大好きな日本人でも、モンゴル史をチャイナ史の一部として歪曲している事実からみれば、謝罪も嘘であって、実際は傲慢であると言わざるを得ない。

ではなぜ、日本の研究者は私たちモンゴル民族の歴史を他人の一部だとしてチャイナに売り渡しているのだろうか。それは、日本人は対中配慮が大好きだからであろう。日本人は「中国に合せば自らの道徳心を示せる」としてきた、と東京大学の平野聡氏は分析している（中西輝政・平野聡「〈中国夢〉はただの白昼夢」『歴史通』2015年3月号）。戦後の歴史学界では台湾側の档案は「反動的な資料」で、史学研究に用いるのにも敬して遠ざけていた。謝罪もチャイナ人にだけたっぷりして、モンゴル人と台湾人、そして満洲人には一言もなかったのではないか。いわば、チャイナ政府とチャイナ人に対しては媚びるような謝罪をしつづけてきたが、他の人々、それもチャイナによって抑圧されつづけ、一時はチャイナと日本の二重の植民地下に置かれていた人たちは忘却されたのである。忘却だけではない。しまいには私たちの民族自決の歴史をニセものにしてチャイナの一部とするほど、私たちに対する裏切り行為をまだ続けている。かつて満洲国時代は「アジアの解放、アジア民族政策の遂行にまで発展する」としてモンゴル人に自決を促しながらも、実際は「対蒙古人政策は、……民族自決は断じて許されない」として「五族協和」を強制した（「満洲国の民族政策とその東亜的意義」『東亜』1943年9月号）。過去に満洲国時代とモンゴル自治邦時代には独立を支持すると甘言をいいながら裏切った。現在は、モンゴル人の歴史はニセものにしてチャイナのものだと書いて裏切った。これは、「モンゴル人の歴史は中国史の一部」だと主張する中国政府やその御用学者たちと同罪である。日本の研究者たちがチャイナ人と組んで、私たちモンゴル民族の歴史を否定しつづけていることになる。こんな歴史的概念交感（交換）が進行しているので、本シンポジウムのパネラーたちの見解が知りたい。

言語と文字のヘゲモニー

近年、旧宗主国の日本に留学してくるモンゴル人は多くなってきた。日本で自由に資料を閲覧し、対中配慮とモンゴル現代史抹殺の環境のなかで気ままに研究に励んでいる。というのは、日本が敬意を抱くチャイナでは档案の公開もすすんでいないからだ。モンゴル人たちが積極的に取りくんでいるテーマは日本統治時代の教育と環境問題である。

教育と環境の問題は19世紀以来、今日までずっと続いてきた二つの課題であり、それは自決と独立の変化形でもあった。日本はモンゴル人を「立派な満洲国市民」に仕立てようと努力した (Li Narangoa, *Educating Mongols and Making 'Citizens' of Manchukuo*, *Inner Asia*, 3, 2001)。1949年以降になると、チャイナもまた支配下のモンゴル人たちを「優秀な中華民族の一員」にしようと躍起になった。私たちは常に他者あるいは他者の一員にならなければならなかった。他者の一員になるだけでは済まない。歴史的に住んできた草原も他人によって開発されなければならない。遊牧は「立ち遅れた生業」で、「農耕こそが進歩的だ」としてチャイナ人は草原を沙漠に変えてみせた。だから、教育と環境問題は、実際は現在に続く民族問題である。ジェノサイドを経験しているモンゴル人 (楊海英前掲『墓標なき草原』ほか) の従順な青年たちは誰も「民族問題」と言えずに、ひたすら教育と環境から着手せざるを得なかった。

日本で研究する際に慎重にならなければならないのは、言語と文字資料の使用である。上で示した教育と環境問題の研究もほとんど日本側が残した日本語の資料のみを駆使してすすめているのが特徴的である。外国語が得意なはずのチャイナの実験者たちが中国語 (Chinese) だけで諸民族の歴史を研究しているのを第三者は「資料運用上に偏りがある」と懸念すると同様に、日本語の資料だけに免罪符を与えられるはずはない。モンゴルを対象とした研究で、モンゴル語とロシア語、その他の多種の文字資料を併用したフスレ (ボルジギン・フスレ『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策』風響社、2011年) や橘誠 (『ボグド・ハーン政権の研究—モンゴル建国史序説1911-1921』風間書房、2011年) の成果が最近の実例である。この二つの研究が日本語のみによる研究構築を遥かに超えている事実は大きい。その点で、本論文集所収のハスチムガ氏はモンゴル語資料をも同時に用いてモンゴル自治邦時代の虚像と実像の分析に取りくんでいる姿勢は高く評価すべきである。

チャイナでも限られた資料公開はある。しかし、ことに日本時代を語った回想録はほぼ例外なく「偽満洲国」や「対日協力者の見解」とラベリングされている。あたかもモンゴル人の歴史そのものがニセもので、非正義的で、チャイナ人にだけ正義があるかのような政治的な断罪である。くりかえし指摘しておくが、モンゴル独自の歴史をニセものとして語ることは、他民族の自決史を否定する植民地史観である。こうした植民地史観も偏った言語と資料を用いたことと、政治的にはチャイナにだけ配慮し謝罪するという政治判断から由来している。当事者が残した資料を無視するほど植民地思想はないだろう。

ついでに付言しておくが、ヨーロッパで発達してきた東洋学の基軸を成すモンゴル学はそもそも文献学である (ハイシツヒ『モンゴルの歴史と文化』岩波書店、1967年。楊海英『モンゴル草原の文人たち』平凡社、2005年)。13世紀から文献を創造

してきたモンゴル人たちは満洲国とモンゴル自治邦時代にも浩瀚なる資料を残した。今後はぜひ、モンゴル人自身の資料を吟味した上で、ニセかチャイナのものなのかを検討しなければならない。これ以上、チャイナ同様にモンゴル人の歴史を否定しないよう、旧宗主国の日本人研究者たちに求めたいものである。

美しかったコラボレーターの笑顔と「不衛生」な草原

モンゴル人自身が自民族独自の歴史を語ると、一部の日本人とチャイナ人はすぐさま「自民族中心主義者」やナショナリストだと攻撃してくる（楊海英『モンゴルとイスラーム的中国』風響社、2007年）。あたかも日本人とチャイナ人は生まれつき「天然の客観主義者」であるかのように尊大に振る舞おうとする。私は、こうしたチャイナ人と日本人の独断と偏見は満洲国時代に民族独立を封殺したのと同罪だと認識している。同罪であるわりには、過去の植民地時代に「コラボレーター」がいた事実をも忘却している。岡田浩樹氏は日本の植民地だった朝鮮の僧侶たちの生き方に注目して、日本化が求められたコラボレーターを取り上げている。日本によって地位向上を実現させた僧侶たちはアンビバレントな存在である。私と高校時代から議論してきたケンブリッジ大学の人類学者はコラボされたナショナリズムについていう。西洋人が植民地を開拓しようとした際にはカテゴライズが好きだった。自他の境界を明確にし、白人優越性を鮮明にして「有色人種」を別範疇に入れて管理した。これに対し、日本とチャイナはとにかく征服し支配しようとする相手との一体性を強調する。「チンギス・ハーンも義経になった」とか、「モンゴル人も中華民族の一員で、チンギス・ハーンは中華民族の英雄のひとりだ」とかのように「同文同種」を前面に押し出す（Uradyn E. Bulag, *Collaborative Nationalism*, Rowman & Littlefield Publishers, INC, 2010）。近年では更に「你中有我，我中有你」とかのようなまさに交感された、「セクシーな民族政策」を打ち出してきているのもその証拠ではなかろうか。

善良な日本人たちは私たちモンゴル人コラボレーターたち（いたかな？）を忘れて、チャイナにだけ反省を表明していても、過去に「美しい蒙古人少女」と「ロマンチックな草原」、「異国情緒たっぷりなラマ教寺院」で以てプロパガンダ誌の表紙を飾った事実を松本ますみ氏は取りあげている。「蒙古人少女」を「美しい」としながらまた、モンゴル人を「非衛生的」だとし、「草原」は「ロマンチック」でも、遊牧は「落伍的」だと表現する。「異国情緒たっぷりなラマ教寺院」で読経するラマたちは「性病を流布させた」とでっちあげる。このアンビバレントな視線は朝鮮にだけでなく、モンゴル人たちに対しても注いでいた事実をハスチムガ氏は報告している。日本人の身体だけが「清潔」だという論理は、チャイナ人のみが「文明的」だ

と自己認識するのと同質である。「同文同種」の日本とチャイナはこんなにも歴史的に同じ思想を培養してきたのに、なぜ歴史認識で深く対立するのか摩訶不思議である。日本統治時代に大勢のモンゴル人たちが列島を目指して、近代化を学ぼうとした。軍人もいれば、詩人もいた事実をボルジギン・オルトナスト氏と私は彼らの足跡を探し求めてきた。モンゴルの詩人が静岡県清見寺で研修していた頃に眺めていた富士山の存在が、のちの創作に大きなインパクトを与えていたことが報告されている。

以上、またもや「モンゴル民族中心主義的」に本シンポジウムの主旨とパネラーたちが寄せてくださった論文の一部について触れた。モンゴル人はチャイナ人ではない。モンゴル人の歴史はニセでもないし、チャイナ史の一部でもないが、それでもチャイナと付き合わざるを得ない。馬場公彦氏は120年という壮大なスケールのなかの日中関係史を整理している。敵対から友好、そして反目という繰り返しであるが、私はここでも平野聡の観点は正鵠を射ていると思う。「日本と中国の関係が割と疎遠であるとき、日本は自意識、あるいは政治・文化的なアイデンティティにおいて安穩している」（平野聡『「反日」中国の文明史』筑摩書房、2014年）。もっとも、チャイナにも多様な思想がある事実を劉燕子氏はある小説を例に報告している。多様な思想も小説の形でしか現れず、日本と同じように公論の一つとして確立できていないのが、チャイナの特徴である。

試金石としてのチャイナと民族問題

チャイナをどうみるか。チャイナが支配する諸民族の境遇と立場にどれほど理解と同情を寄せるか。理解と同情は場合によっては軽薄なポーズでしかないが、少なくともどのように発言し、研究するかは日本の思想界を分断させる試金石ともなっている。サヨク陣営は決してチャイナの民族問題について発言しない。チャイナがチベットを侵略し、モンゴル人をジェノサイドの対象とし、ウイグル人を今でもことあるごとに射殺していわゆる「テロ行為」を弾圧している事実にも目をつぶっている。右側の論客は積極的に諸民族が迫害されている事実を取りあげるが、サヨクはそうした行為を「国家主義の復活の道具」だと批判する。サヨクの思考に沿って考えると、私たちはまたもや「他人の道具」とされていることになる。昔の左翼には正義感とロマンがあった。帝国主義によって抑圧されている弱小民族を解放しようという正義と、「人類の理想としての共産主義の実現」というロマンだった。今のサヨクたちには正義感もロマンもない。日本とアジアは交感し合っているが、思想界の貧相化をもたらした原因の一つに、過度にチャイナを正義の化身とみなしたことが挙げられよう。

他者を植民地化して統治するのは日本とチャイナの専売特権ではなかった。小林勝氏はイギリスのインド支配をマルクスの理論創成に遡って論じている。マルクスは「イギリスのインド支配の将来の結果」などでいわゆる「アジア的生産様式」論を出した（マルクス＝レーニン主義研究所編『マルクス＝エンゲルス選集 第8巻上 中国とインドおよび植民地問題』大月書店、1949年）。専制主義も特徴の一つたるアジアである。アジアは革命を経てもまた専制的である、とウィットフォークルは指摘した（カール・ウィットフォークル 『東洋的専制主義』アジア経済研究所、1961年）。マルクスの盟友エンゲルスは1849年に書いた名文「ハンガリアの革命闘争」と「民主的汎スラヴ主義」などのなかで、私たち中央アジアの遊牧民たちを「歴史なき民族」だと表現して差別した（マルクス＝レーニン主義研究所編『マルクス＝エンゲルス選集 第3巻下 中国とインドおよび植民地問題』大月書店、1949年）。チャイナの周辺にいる諸民族の自決史を語ろうとしない日本のサヨクたちと、諸民族の言語と文字資料を軽視する日本人とチャイナ人の現代史研究者たちはエンゲルスの差別的な思想を忠実に守っている。

私は言語と文字資料のヘゲモニーについて触れた。小林勝氏は内田樹の見方を借りながら、「日本の原発が立地されているのが総じて明治新政府によって差別的な扱いを受けてきた旧幕府方の領地」である点に注目している。国家を凌駕して猛威を振るった政治的ヘゲモニーは日本にも現存しているとの指摘は重い。チャイナは今や「西部大開発」と称しながらモンゴル人の草原を大義名分の下で開墾して沙漠に変えているし、ウイグル人の故郷においても人口比を逆転させている。過去に満洲国やモンゴル自治邦政権下で日本も同様な実践をしていた。日本が悪で、チャイナは善で、モンゴル人はニセだという論理はもはや通らない。

交感は一瞬にできたかもしれないが、プレイヤーたちの思惑はそもそも最初から同床異夢だった。

もしアレクサンダー大王やカエサルやナポレオンが、汎スラヴ主義者がいま、そのおとろえた患者のためにうたっている憐憫の情をもっていたとするならば、歴史はどうなったことであろうか！（エンゲルス「民主的汎スラヴ主義」）

エンゲルスはチンギス・ハーンの名を挙げていなかった。チンギス・ハーンと義経の関係は日本流に「曖昧」にしておこうが、呻吟している「患者」たちが交感し合った時代の後遺症に苦しめられている以上、建前と本音を越えた議論が必要であろう。

※本シンポジウムは静岡大学がすすめる新型研究領域の一つである「アジア学の構

築」の一環として開催されたものである。人文社会科学部学部長の今野喜和人氏と評議員の寺村泰氏ら、それにアジア研究センター長の上利博規氏らの多大なご支援とご理解の下で無事に開催できた。記して感謝を申し上げる。